

2021. 9. 26. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書9章2～8節
『わからなければ聴きなさい』

もう14～15年前のことです。教会員のMさんという女性が肺ガンのため二年間にわたる厳しい闘病の末に天に召されて行かれました。まだ46歳でした。三人の子どもたちの内、下の子はまだ小学校3年生でした。闘病中、彼女は自分の物言わぬガンに語りかけたそうです。「なぜあなたはそんなに速く大きくなるの。あなたが大きくなると私は死んでしまう。私が死んだらあなたも死んでしまう。何とか共存する道はないの。」と。そんな「対話」を積み重ねながら、死の間際には「この病は神さまの恵みの贈り物」だったと告白されるに至るのです。たいへん深い自分自身へのかえりみと対話、そして傾聴が導き出したひとつの問いに対する応えだったのかと思います。

マルコの9章2節以下で、主イエスはペトロとヤコブとヨハネだけを連れて高い山に登られました。いわゆる「山上の変貌」といわれる箇所です。この三人の弟子たちだけが登場するのも、ヤイロの娘の癒しの記事と同じように、「これから福音の質を問う大切な事柄が語られますからよく聴きなさい」という前置きです。山上で突然イエスの姿が変わり、彼らは旧約聖書のモーセとエリヤが現れて主イエスと語り合う姿を間近に見ます。ペトロは何を言っているのか分からなくなり思わず口をはさみます。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」すると、雲の中から声がして「これはわたしの愛する子、これに聞け。」と言われました。弟子たちが辺りを見まわしても、そこにはもう主イエスが一緒におられるだけだったという記事です。このことは身を震わすような感動的な出来事やいかなる神秘的な出来事も福音、言い換えるならば「対話する生と死」には程遠いものでしかないということなのです。ここで問われる大切なことはただ一つ、主イエスに聴くこと、それが福音の質にかなうことだと語っているのではないのでしょうか。「主イエスに聴く」という自分自身との深い対話、これこそが神の求めたもうわたしたちの人生への恵みなのです。

わたしたちは不安な状況におとしめられたり、悲しくなって自分ではどう対応したらいいのかさえ分からなくなった時、自分と対話することを失い、ペトロのようになおさら口を開いてしまいます。例えば、寒い日には「寒い、寒い」と言ってしまいます。寒いと言っても寒さはなくなりませんが、気持ちが口から出ると楽になるのです。不安にかられ、難しさに打ちのめされると何か言わなければならないみたいな脅迫観念に捕らわれてしまいます。言うとなんか楽になりそうだからです。しかし、言うとなんか楽になるのはこちらであって、相手ではありません。そうではなく心を開いて主イエスの語りかけ(=寄り添い)の現実を聴こうとすべきなのです。ボルノーという哲学者は「対話とは、ひょっとすると自分の方が間違っているかも知れないという可能性を常に残して相手の言うことを聴くことである」と言います。この「聴く」という対話の精神を失ってはならないのです。

苦しむ人を前にして自分が楽になるために発した言葉など無に等しいものです。わたしたちに出来るのはその苦しみを聴くことなのです。そんな時、主イエスはわたしたちの人生の傍らに寄り添われるのです。